〈新　刊　紹　介〉

（価格は税込定価）

李媛著『空海の字書――人文情報学から見た篆隷万象名義――』

日本現存最古の漢字字書である高山寺本『篆隷万象名義』に関わるデータベースの構築，全文テキスト化，それに伴う原本調査と写本調査，そして『篆隷万象名義』本文の基礎的研究を行う。

本書は 3 部 9 章からなる。各部の構成は以下のとおりである。「序文」「はじめに」に続き，「第 1 部　多漢字古写本のデジタル化」は「第 1 章　データベースの構築による情報処理学的な研究方法」「第 2 章　篆隷万象名義の全文テキストと公開システム」からなり，資料のデータベース化に関する方法や問題点などの解説が行われる。「第 2 部　書物学から写本へのアプローチ」には「第 3 章　原本調査からみた篆隷万象名義における文字訂正の問題」「第 4 章　篆隷万象名義の近世写本」の，書誌学的な記述が配される。「第 3 部　デジタル化による写本の本文研究」は，「第 5 章　埋字と脱字」「第 6 章　字体と字種との区別から見た重出字」「第 7 章　掲出字の文字同定」「第 8 章　篆隷万象名義における漢文節の意味注記」「第 9 章　大乗理趣六波羅蜜経釈文所引玉篇逸文による本文校訂の研究」，以上 5 章からなる。巻末に「『篆隷万象名義』用例索引」を付す。（遠藤佳那子）

（2023 年 3 月 31 日発行　北海道大学出版会刊　A5 判横組み　317 頁　定価 19,800 円　ISBN 978-4-8329-6889-9）

半沢幹一著『方言のレトリック』

本書は比喩とオノマトペを対象とし，レトリックの観点から方言を捉えるものである。全国的な比喩語の様相や，特定地方の比喩表現を取り上げるなど多角的に方言比喩語を論じる。また，方言においてオノマトペを取り上げる意義を問い直し，オノマトペの言語的特性を示す。

そのほかに手話語，書のレトリックも取り上げる。手話語と書は直接的に方言に関わらないものの，位相という点からみたとき前者は言語使用者の知覚的位相に，後者は言語の形式的位相に関わるものとして位置づけられている。本書はひつじ研究叢書〈言語編〉第 200 巻として刊行された。

構成は次のとおりである。「はじめに」に続き，「Ⅰ　方言比喩語」には「方言比喩語の成立」，「方言比喩語の東西比較」，「方言比喩語の地方差」，「方言比喩語の動機付け」，「全国方言比喩語の概要」，「方言の比喩語源」，「北東北方言の比喩」の 7 つの論が収められている。また，「Ⅱ　方言オノマトペ」には「方言とオノマトペ」，「オノマトペという比喩」，「オノマトペと音声・文字」の 3 つの論が収められている。「Ⅲ　手話語の

レトリック」には「手話語の県名語源」,「手話語の動詞と動作」,「手話語のオノマトペ」が,「Ⅳ　書のレトリック」には「書という言語芸術」が収められている。末尾に「詳細目次」と「あとがき」が付く。(椎名渉子)

(2023 年 10 月 20 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　318 頁　定価 7,700 円　ISBN 978-4-8234-1204-2)

大津隆広編『データを用いたことばとコミュニケーション研究の手法』

本書は，コーパス等のデータを用いた言語研究の手法を具体的に提示することを主眼に置き，ことばとコミュニケーションの実態に関する論考が収められた論文集である。各論考の冒頭に研究概要，キーワード，研究意義や方法，使用データのタイプや説明も付され，データを用いた言語研究の初学者に向けた入門書の役割も果たす。

本書の構成は次のとおりである。「はしがき」に続き，「1. 語彙・構文」には「CEFR レベルによる英語学習者の作文の特徴分析――ICNALE に基づいた中間言語の国際比較――」(内田諭),「構文の「枠」の探索と規定――超大規模コーパスを利用した動詞との共起要素の交差的分析――」(土屋智行),「形状類別詞「片」「张」「扇」「面」について」(劉驫)。「2. 会話と語り・文法形式」には「日英語の会話中の発話――引用形式と主語の人称――」(松村瑞子),「「語り」におけるスペイン語直説法過去完了形――英語過去完了、フランス語直説法大過去との対照の観点から――」(山村ひろみ)。「3. 会話表現・談話標識」には「反応表現における韻律バリエーションに関する会話分析的アプローチ――英語 really を例に――」(横森大輔),「In Other Words and I Mean; Procedural Constraints and Cognitive Effects」(Takahiro OTSU)。「4. 意味拡張・言語接触」には「説き起こしを表す「だいたい」の意味拡張」(大橋浩),「Language Contact in Virtual Spaces; The Kin Terms Bli, Bro, and Bos in Balinese Online Discourse」(Edmundo Cruz LUNA)。「5. 会話パフォーマンス・相互行為」には「英語母語話者によるパブリックスピーチの特徴――マルチモーダリティの観点から――」(冬野美晴,山下友子),「日本語 L1・L2 話者によるグループワークの相互行為分析――言いたいことが伝えられなかった会話連鎖――」(山田明子)。末尾に「索引」と「執筆者紹介」が付く。(椎名渉子)

(2023 年 10 月 31 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　260 頁　定価 6,600 円　ISBN 978-4-8234-1043-7)

大西拓一郎著『方言はなぜ存在するのか――ことばの変化と地理空間――』

本書では地理的側面から語の変化を考察し，方言の存在理由を解き明かす。第Ⅰ～Ⅲ部では,「類音牽引」,「同音衝突」,「民間語源」,「混淆」といった語彙の変化から方言分布の形成過程を見たうえで，それらを統括する「有縁性」・「有縁化」を論じる。また，第Ⅳ部では文法の変化がもたらす分布を捉える。まとめの第Ⅴ部ではこれらをもとに方言分布の基本則を提示する。

本書の構成は次のとおりである。「序　ことばの変化と場所――方言とは何か？方言はなぜ存

在するのか？――」に続き，「第Ⅰ部　ことばと物と場所と」には「第1章　気候と再命名――「とうもろこし」とモロコシ――」，「第2章　弱い固有名詞の強い力――「じゃがいも」で連鎖する類音牽引――」，「第3章　方言・人名・地名の地理的関係――山口県に山口さんが多いわけではない――」。「第Ⅱ部　ことばのぶつかり合い」には「第4章　同音衝突の成立――庄川流域の「桑の実」と「燕」――」，「第5章　同音衝突の本質――「虫」と「神主」、「煮こごり」と「大根汁」――」，「第6章　同音衝突と変化のスピード――「とうがらし」と「ピーマン」――」。「第Ⅲ部　ことばの混ざり合い」には「第7章　民間語源再考――「ひっつきむし」と男性器――」，「第8章　混淆――混ざり合う「そばかす」――」，「第9章　有縁性・有縁化」。「第Ⅳ部　文法の変化と方言の形成」には「第10章　文法の変化と分布――「仕事に行かないで遊ぶ」多様性――」，「第11章　文法変化の発生・拡大・完成――否定過去のンカッタと受身の助詞――」。「第Ⅴ部　方言の地理空間」には「第12章　方言分布の基本則――距離と縮尺、語彙と文法――」，「第13章　方言の地理空間と視点――方言はなぜ存在するのか――」。末尾に「あとがき」，「各章の関連論文・関連発表」，「本書を著すにあたって活用した研究課題」，「索引」が付く。（椎名渉子）

（2023年11月1日発行　大修館書店刊　A5判縦組み　256頁　定価2,750円　ISBN 978-4-469-21395-9）

沈力編『類型論から見た「語」の本質』

サピアが自然言語の形態的特徴は総合的指標と融合的指標で分析できると提唱して以来，従来の形態統語論は総合的・融合的言語に基づいて「語」を定義づける。一方で孤立型言語にはそれが当てはまるとは言えない。本書は環太平洋の諸言語の語形成について記述・理論化し，従来の言語理論に対して新たな見方を提示する。

本書は全5部，11編の論考から構成される。「第I部 孤立型言語から見た「語」」は「連続変調から見た馬山チワン語の語形成（沈力・韋彤）」「北京語における形態素の認定（沈力）」以上2編からなる。「第II部 複統合型言語から見た「語」」には「スライアモン語の語形成について（渡辺己）」「複統合的タイプにおける「語」――ハイダ語（北米先住民諸言語）の場合――（堀博文）」以上2編を収める。「第III部 膠着型言語から見た「語」」には「ブリヤート語の「複合語」とその語性（山越康裕）」「南琉球宮古語伊良部島方言における複合と語性（下地理則）」「日本語におけるオノマトペ動詞の語性と体系性（秋田喜美）」以上3編からなる。「第IV部 形態音韻論から見た「語」」は「音韻論から見た「語」の特性（窪薗晴夫）」「発話の型としての「語」（定延利之）」以上2編，「第V部 形態統語論から見た「語」」は「日英語の形容詞に関わる語形成のメカニズムと意味解釈について（由本陽子）」「虚辞動詞の分散形形態論的アプローチ（星英仁）」以上2編を収める。（遠藤佳那子）

（2023年11月6日発行　ひつじ書房刊　A5判横組み　351頁　定価7,480円　ISBN 978-4-8234-1191-5）

池澤正晃著『『大漢和辞典』の百年』

世界でも最大級の漢和辞書，諸橋轍次『大漢和辞典』の編纂史を綴った一冊である。大修館書店のウェブサイト「漢字文化資料館」に「写真でたどる『大漢和辞典』編纂史」のタイトルで連載したものをもとに加筆，再構成したものである。

「第一部 鈴木一平と諸橋轍次」では大修館書店創業者である鈴木一平と諸橋轍次それぞれの半生を描く。「第二部 『大漢和辞典』の百年」では，時系列に沿って鈴木と諸橋の邂逅から『大漢和辞典』完結までの歴史を辿ってゆく。章の合間には「余滴」として活字の母型や種字，紙型に関する記述も配される。（遠藤佳那子）

（2023 年 12 月 10 日発行　大修館書店刊　A5 判縦組み　254 頁　定価 3,740 円　ISBN 978-4-469-23287-5）

岡部嘉幸・橋本行洋・小木曽智信編『コーパスによる日本語史研究――近世編――』

本書は国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史の新展開」の成果物であり，これまで刊行された「近代編」（2021 年 11 月），「中世編」（2022 年 10 月）に続くものである。〈展望〉〈論文〉〈解説〉の 3 部，全 20 章から構成される。各部の構成は以下のとおりである。

〈展望〉は「コーパスによる近世語の研究（岡部嘉幸）」「近世語の資料とコーパス（村上謙）」の 2 編からなる。〈論文〉は［通時的研究］として，「近世前期における逆接仮定条件史――トモとトテ・テモ共存の意味――（矢島正浩）」「『日本語歴史コーパス』に見る形容詞の連接（村山実和子）」「近世の「夜食」（橋本行洋）」「近世近代における「あて字」と「熟字訓」――人情本の漢字表記を中心に――（銭谷真人）」，以上 4 編を収める。続いて［共時的研究］として「『日本語歴史コーパス 江戸時代編』に見られるダトテとダッテの使用状況（髙谷由貴）」「近世における従属節の階層性（北﨑勇帆）」「『古今集遠鏡』に見られる程度副詞類とその周辺――洒落本での使用状況との比較――（市村太郎）」「『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洒落本』（京都・大阪）を利用した動詞待遇表現化のコロケーション（村上謙）」，以上 4 編を収める。［資料研究］として「近松浄瑠璃における動詞の使用傾向――コーパスデータから動詞の基本度について考える――（片山久留美・村上謙）」「接続辞を指標とした近世資料の統計分析の試み（宮内佐夜香）」「『日本語歴史コーパス 江戸時代編』を用いたテキストアナリティクス（上阪彩香）」「『古今集遠鏡』を対象とするコーパス構築の試み（市村太郎）」「『春秋雑誌 会話篇』の電子化について（常盤智子）」，以上 5 編を収載する。

最後に〈解説〉に「『日本語歴史コーパス 江戸時代編』の設計と構築（小木曽智信）」「『日本語歴史コーパス 江戸時代編 I 洒落本』解説（市村太郎・村山実和子）」「『日本語歴史コーパス 江戸時代編 II 人情本』解説（村上実和子）」「『日本語歴史コーパス 江戸時代編 III 近松浄瑠璃』解説（片山久留美）」「『日本語歴史コーパス 江戸時代編 IV 随筆・紀行』Ver.04（芭蕉の紀行文）解説（松崎安子）」5 編を収める。（遠藤佳那子）

（2023 年 12 月 11 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　393 頁　定価 4,400 円　ISBN 978-4-8234-1134-2）

張春陽著『新漢語成立史の研究』

西洋から新しい概念を取り入れるため登場した新漢語の中で特に具象概念を表す新漢語に注目し，その成立の過程を明らかにする。本書は全6部13章からなる。「I　序論」に「第1章 新漢語とは」「第2章 新漢語の研究史概観」「第3章 新漢語研究における課題と本書の目的」，「II　具象概念を表す新漢語研究の資料」として，「第4章 幕末・明治初期の遣外使節団員の手による」「第5章 西洋近代文明の導入に関わる公的記録類」を配し，これまで新漢語研究に用いられた資料の整理を行う。「III　西洋文明利器の受容と具象概念を表す新漢語の成立」には「第6章 新漢語「蒸気機関」の成立」「第7章 新漢語「電信機」の成立」を配し，具象概念を表す語を取り上げる。「IV　近代都市建設と具象概念を表す新漢語の成立」には前部に引き続き，「第8章 新漢語「煉瓦」の成立」「第9章 新漢語「灯台」の成立」「第10章 新漢語「水道」の成立」のように具象概念を表す語について論じる。「V　新漢語の成立における西洋見聞録類及び公的記録類の位置づけ」には，「第11章 新漢語の成立における西洋見聞録類の位置づけ」「第12章 新漢語の成立における公的記録類の位置づけ」を収め，従来あまり資料とされなかった資料群の価値について論じる。最後に「VI　結論」「第13章 具象概念を表す新漢語の研究」を収める。（遠藤佳那子）

（2023年12月12日発行　ひつじ書房刊　A5判横組み　308頁　定価8,360円　ISBN 978-4-8234-1193-9）

中俣尚己編『話題別コーパスが拓く日本語教育と日本語学』

本書では話題によって出現する文法項目の異なりに着目し，編者を中心に構築された『日本語話題別会話コーパス：J-TOCC』と既存の会話コーパスから作成した『話題別日本語語彙表』の解説およびそれらに関する日本語教育学・日本語学からの論考を収めている。

「まえがき」に続き，「第1部　『日本語話題別会話コーパス：J-TOCC』と『話題別日本語語彙表』」には，「プロジェクトの紹介と本書の構成」（中俣尚己），「『日本語話題別会話コーパス：J-TOCC』の解説」（中俣尚己，太田陽子，加藤恵梨，澤田浩子，清水由貴子，森篤嗣），「『話題別日本語語彙表』の解説」（中俣尚己，小口悠紀子，小西円，建石始，堀内仁），「話題別コーパスの独自性――話題と話者の関係を考える――」（石川慎一郎）。「第2部 話題と言語現象」には「話題と無助詞現象」（清水由貴子），「話題による「まあ」の使用傾向」（加藤恵梨），「話題・地域による自問発話の使用傾向」（小西円），「話題と助詞の出現頻度――間投助詞「さ」に注目して――」（中俣尚己），「地域・性別によるオノマトペの使用傾向」（太田陽子）。「第3部　話題と日本語教育」には「話題精通度と言語表現の出現傾向の関係」（森篤嗣），「日本語教材における話題の分布と難易度」（橋本直幸），「話題と統語的複雑さ」（堀内仁），「話題は類義語分析に使える」（建石始），「J-TOCCと『話題別日本語語彙表』を活用したタスクベースの日本語指導」（小口悠紀子），「話題を制す

る者は日本語教育を制す」（山内博之）。末尾に「編者・執筆者紹介」を付す。（椎名渉子）

（2023 年 12 月 15 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　278 頁　定価 3,300 円　ISBN 978-4-8234-1194-6）

池田証寿著『日本辞書史研究――草創と形成――』

日本辞書の草創期と形成期である奈良時代～平安初期の辞書音義を対象として，出典探索と利用法，漢字字体とその注記，漢字情報処理の 3 つの方法によって研究するものである。

本書は以下のとおり全 5 部 16 章から構成される。「第一部　総論」は「第一章　古辞書研究への誘い」「第二章　日本古辞書研究の現状と課題」「第三章　古辞書の研究方法と実際――貞苅伊徳の方法――」以上 3 章からなる。「第二部　仏典音義」には「第四章　大治本『新華厳経音義』と石山寺本『大般若経音義』――玄応『一切経音義』の利用――」「第五章　『新訳華厳経音義私記』――先行資料の利用法――」「第六章　高山寺本『新訳華厳経音義』――宋版巻末音義の利用――」「第七章　音義書の日本語語彙」以上 4 章を収める。「第三部　字書」は「第八章　『篆隷万象名義』――和訓と二反同音列――」「第九章　『新撰字鏡』（一）――玄応『一切経音義』の利用――」「第十章　『新撰字鏡』（二）――本文解読上の諸問題――」「第十一章　図書寮本『類聚名義抄』――単字字書的性格――」「第十二章　観智院本『類聚名義抄』――掲出項目数・掲出字数と注文の分類――」「第十三章　仏典音義を通して見た『新撰字鏡』と『類聚名義抄』」以上 6 章からなる。「第四部　字様書」は「第十四章　杜延業『群書新定字様』――敦煌本と日本古辞書――」「第十五章　郭迻『一切経類音決』――『類聚名義抄』と『醍醐等抄』――」，「第五部　漢字情報処理」は「第十六章　平安時代漢字字書総合データベース」からなる。（遠藤佳那子）

（2024 年 1 月 25 日発行　汲古書院刊　A5 判縦組み　588 頁　定価 16,500 円　ISBN 978-4-7629-3686-9）

国立国語研究所編『日本語の大疑問 2』

本書は 2021 年に刊行された『日本語の大疑問』の続編として，一般読者の疑問に国立国語研究所員や研究所に関係の深い研究者が回答するかたちをとりながら，日本語の音声・文法構造・歴史・運用の実態が取り上げられている。前作と同様に一般読者の関心を引く章タイトルと疑問が並んでいる。

「第 1 章　若者ことば・話しことばのナゾ」，「第 2 章　どうにもモヤッとすることば」，「第 3 章　文字にまつわるミステリー」，「第 4 章　そろそろ決着をつけたい日本語」，「第 5 章　ことばの歴史を探る」，「第 6 章　外国人学習者がとまどう日本語」の 6 章から成り，合計 37 の疑問に回答する。末尾には「あとがき」，「執筆者紹介」，「初出一覧」を付す。（椎名渉子）

（2024 年 1 月 30 日発行　幻冬舎刊　新書判縦組み　306 頁　定価 1,056 円　ISBN 978-4-344-98718-0）

甲田直美著『物語の言語学――語りに潜むことばの不思議――』

本書は，言語学，日本語学，物語論の初学者を対象に，物語・神話・マンガ・うわさ・都市伝説などの身近な物語の事例を用いて物語を捉えたものである。マンガやアニメ，映画，文学作品などを取り入れながら，言語文化論，メディア論，芸術，文学といった言語学との隣接領域の知識も得られるような構成をとる。各章と関連する言語学関連分野も章のタイトルに示され，物語という視点から多角的にことばを捉えることができるようになっている。

本書の構成は次のとおりである。「本書の構成」，「序章　物語と人間」に続き，「第 I 部　物語から描く言語学の世界」には「第 1 章　『星の王子さま』に見る世界の言語――比較・対照言語学」，「第 2 章　物語と談話の法則――文法論」，「第 3 章　音と耳から考える物語――音声学」，「第 4 章　物語の翻訳――意味論」，「第 5 章　物語と時間――談話分析」，「第 6 章　構造主義と神話研究――音韻論」，「第 7 章　物語作品の享受と分析――文体論」。「第 II 部　物語の技巧と文化」には「第 8 章　物語の技巧――物語論」，「第 9 章　物語の共通性――物語の類型論」，「第 10 章　ドラマ・アニメの構造とシナリオ術――シナリオ術」，「第 11 章　マンガ、遊び、サブカルチャー――文化論」，「第 12 章　マンガと視点現象――マンガ学」。「第 III 部　物語をとおして「わたし」を知る」には「第 13 章　雑談と「もの」語り――会話分析」，「第 14 章　自己を語る、ケアの物語――語用論」，「第 15 章　コミュニケーション・ツールとしての物語――コミュニケーション論」。末尾に「付章　物語のフィールドワーク」，「註」，「言及した主な作品名」，「参考文献」，「索引」，「あとがき」が付く。（椎名渉子）

（2024 年 2 月 7 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　254 頁　定価 2,640 円　ISBN 978-4-8234-1202-8）

阿久津智著『音声・音韻の概念史』

本書は日本語の音韻・音声に関わる用語の語史研究の著書である。「I　総論」「II 各論 I 音声・音韻用語の概念史」「III　各論 II 「音韻」の概念史」から構成される。

第 1 部には「第 1 章 語史（語誌）と概念史」「第 2 章 専門語の語史研究の方法」を収め，専門語の語史研究の方法を論じる。第 2 部には各論として，「第 3 章 「音声」」「第 4 章 「発音」」「第 5 章 「発声」」「第 6 章 「音節」」「第 7 章 「音素」」「第 8 章 「音」」「第 9 章 「音韻論」と「音声学」」「第 10 章 「音韻学」」「第 11 章 「半濁音」」を収め，それぞれの語史の記述を行う。第 3 部は「音韻」という語に焦点を絞り，「第 12 章 「音韻」とは何か」「第 13 章 音韻の実用性と普遍性」「第 14 章 言語音を表す「音韻」」「第 15 章 明治前期の「音韻」」以上 4 編にわたって論じる。（遠藤佳那子）

（2024 年 2 月 13 日発行　ひつじ書房刊　A5 判縦組み　387 頁　定価 11,000 円　ISBN 978-4-8234-1227-1）

泉大輔著『現代日本語の逸脱的な造語法「文の包摂」の研究』

本書は，「振り込め詐欺」などのように，語の内部に文相当の要素が含まれる逸脱的な言語現象を「文の包摂」と名付け，形式的・意味的特性を踏まえてその成立原理を解明するものである。本書はひつじ研究叢書〈言語編〉第 203 巻として刊行された。JSPS 科研費特別研究奨励費 JP22K20017，JSPS 科研費研究成果公開促進費 JP23HP5050 の助成を受けたものである。

構成は次のとおりである。「まえがき」に続き「Ⅰ　序論」には「第 1 章 「文の包摂」という逸脱的な造語法」，「第 2 章　先行研究における「文の包摂」」。「II　本論 1 「文の包摂」の記述的な考察（総論）」には「第 II 部のはじめに」，「第 3 章 「文の包摂」の出現状況の調査」，「第 4 章 「文の包摂」の諸特徴の記述」，「第 II 部のおわりに」。「III 本論 2 「文の包摂」の記述的な考察（各論）」には「第 III 部のはじめに」，「第 5 章　後項「発言」の記述的考察」，「第 6 章　後項「感」の記述的考察」，「第 7 章　後項「程度」の記述的考察」，「第 8 章　後項「攻撃」の記述的考察」，「第 III 部のおわりに」。「IV 本論 3 「文の包摂」の理論的な考察」には「第 IV 部のはじめに」，「第 9 章 「文の包摂」の文法的な成立基盤」，「第 10 章 「文の包摂」の語彙的な成立基盤」，「第 11 章 「文の包摂」の音韻的な成立基盤」，「第 12 章 「文の包摂」の表現効果的な成立基盤」，「第 IV 部のおわりに」。「V　結論」には「第 13 章 「語」と「文の包摂」」，「第 14 章　本研究のまとめと今後の展望」。「参考文献」，「辞書・事典・データベース類既発表論文との関係（初出一覧）」，「謝辞」，「索引」を付す。（椎名渉子）

（2024 年 2 月 20 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　364 頁　定価 7,480 円　ISBN 978-4-8234-1215-8）

佐伯暁子著『日本語助詞「を」の研究』

本書は，助詞「を」の文法的な振る舞いを考察するものであり，現代語と古代語の両面からの考察から「を」の用法の体系化を試みた書である。本書はひつじ研究叢書〈言語編〉第 199 巻として刊行された。また，刊行にあたり 2023 年度伊藤忠兵衛基金出版助成金を受けている。

「まえがき」に続き「Ⅰ　格助詞「を」」には，「第 1 章　平安時代から江戸時代における二重ヲ格」，「第 2 章　現代語における二重ヲ格」，「第 3 章　現代語における状況を表す「～（の）中を」「～（の）中φ」，「第 4 章　現代語における状況を表す「～（の）下を」」，「第 5 章　現代語における状況補語 「～（の）中を」「～（の）下を」「～（の）ところを」」，「第 6 章　現代語における時間を表すヲ格」，「第 7 章　現代語における経由点・状況・時間を表すヲ格」。「Ⅱ　接続助詞「を」と接続助詞的な「を」」には「第 8 章　現代語における接続助詞用法の「～ところを」」，「第 9 章　現代語における接続助詞用法の「～べきを」」，「第 10 章　接続助詞用法の「～べきを」の推移　古代語から現代語へ」，「第 11 章　現代語における接続助詞用法の「～ものを」」，「第 12 章　平安

時代から江戸時代における接続助詞用法の「～ものを」。末尾に「参考文献」,「辞書類」,「調査資料」,「あとがき」,「索引」が付く。(椎名渉子)

(2024 年 2 月 20 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　236 頁　定価 6,820 円　ISBN 978-4-8234-1201-1)

相良啓子著『日本手話の歴史的研究――系統関係にある台湾手話、韓国手話の数詞、親族表現との比較から――』

日本手話とそこから分岐した台湾手話，韓国手話，これら系統的に関連のある 3 つの手話言語を対象として，数詞および親族表現を記述し，音韻・形態・意味の観点から，それぞれの語彙の歴史的変化の特徴を明らかにする。従来の手話の歴史言語学的研究は個別事例の指摘にとどまることから，本書では体系的記述を試みている。

本書の構成は以下のとおりである。「第 1 章 手話の歴史研究の新たな可能性」「第 2 章 日本手話系の言語における表記法」「第 3 章 数詞にみられる様々な表現とその変化」「第 4 章 親族表現にみられる様々な表現とその変化」「第 5 章 日本手話系の言語における語の変化の種類とその特徴」「第 6 章 現在の日本および台湾におけるふたつの数の体系とその変化」「第 7 章 まとめと今後の課題」，以上 7 章からなる。(遠藤佳那子)

(2024 年 2 月 22 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　301 頁　定価 9,350 円　ISBN 978-4-8234-1221-9)

薛鳴著『「関係」の呼称の言語学――日中対照研究からのアプローチ――』

本書では,「関係」をあらわす呼称として代表的な「親族名称」を対象とした日中対照研究を展開する。中国語の親族名称は世界の言語のなかでも複雑な体系を有しているが，そうした社会の「関係」のありかたが反映された親族名称の使用は言語行動やコミュニケーション上の問題にも繋がり得るとし，言語形式の枠組みと，言語使用の面から論じる。本書はひつじ研究叢書〈言語編〉第 202 巻として刊行された。また，JSPS 科研費 JP23HP5053 の助成を受けたものである。

本書の構成は次のとおりである。「はじめに」に続き,「第 1 章　言語形式としての親族名称 「関係」の表示」,「第 2 章　家族・親族内における親族名称の言語使用」,「第 3 章　テクノニミーについての日中対照」,「第 4 章　家族・親族外の親族名称の言語使用　日本語の場合」,「第 5 章　家族・親族外の親族名称の言語使用　中国語の場合」,「第 6 章 「関係」にまつわる言語行動の諸相」,「第 7 章 “们”にまつわる「関係性」」。末尾に「おわりに」,「参考文献」,「あとがき」,「索引」を付す。(椎名渉子)

(2024 年 2 月 22 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　224 頁　定価 5,280 円　ISBN 978-4-8234-1212-7)

定延利之・丸山岳彦・遠藤智子・舩橋瑞貴・林良子・モクタリ明子編『流暢性と非流暢性』

本書は言語にかかわるコーパス言語学，会話分析，言語教育学，言語障害学などの諸分野の研究で見られる流暢性・非流暢性にかかわる用語や論点を包括的，根本的に捉え

ることを目指した論文集である。諸領域における論点を示し，分野を越えた議論の活性化に資する一書である。

構成は次のとおりである。「はじめに」に続き，「第 1 部　総論」には「第 1 章　発話の（非）流暢性への総合的なアプローチ」（定延利之）。「第 2 部　記述言語学からみた（非）流暢性」には「第 2 部のねらいと論文紹介」（定延利之）に続き，「第 1 章　（非）流暢性と現場性」（定延利之），「第 2 章　コーパスと談話から見た接続表現の共起と（非）流暢性」（アンドレイ ベケシュ　ボル ホドシチェク，仁科喜久子，阿辺川武）。「第 3 部　コーパス言語学からみた（非）流暢性」には「第 3 部のねらいと論文紹介」（丸山岳彦）に続き，「第 1 章 「通時音声コーパス」とフィラーの経年変化」（丸山岳彦），「第 2 章　言い直し表現のアノテーション――その基準と方法論の検討――」（吉田奈央，丸山岳彦），「第 3 章 語句の選択誤りを伴う言い直し表現の細分化」（吉田奈央）。「第 4 部　会話分析からみた（非）流暢性」には「第 4 部のねらいと論文紹介」（遠藤智子），「第 1 章 「うん」と「う～ん」のはざま――相互行為の資源としての非流暢性――」（早野薫），「第 2 章　文節末延伸の韻律的バリエーションとその相互行為上の帰結」（横森大輔），「第 3 章　サービス場面における依頼発話にみられる非流暢性と優先組織」（黒嶋智美），「第 4 章　自問発話の応答要求性」（遠藤智子），「第 4 章　L2 日本語話者の自己モニタリング――「漸次的な発話産出」に焦点を置いて――」（井畑萌）。「第 5 部　言語教育からみた（非）流暢性」には「第 5 部のねらいと論文紹介」（舩橋瑞貴）に続き「第 1 章　日本語学習者の自問発話」（小西円），「第 2 章　自問発話の音調の多様性と習得――「何というか」を手がかりに――」（須藤潤），「第 3 章 口頭発表におけるフィラー――口頭発表指導への応用を視野に入れて――」（舩橋瑞貴），「第 4 章 非流暢な母語話者と割り込めない学習者――電話会話における期待に沿えない回答への学習者の対応――」（平田未季），「第 5 章　合意形成場面における非流暢性――日本語母語話者と日本語学習者の発話を比較して――」（宮永愛子），「第 6 章　日常談話における「ちょっと」の多義性と非流暢性」（鹿嶋恵，西村史子），「第 7 章　初級日本語テキストにおける「ちょっと」の出現状況」（西村史子，鹿嶋恵）。「第 6 部　言語障害からみた（非）流暢性」には「第 6 部のねらいと論文紹介」（林良子）に続き「第 1 章　運動障害性構音障害におけるリズム異常の印象――子音の歪み、発話明瞭度との関係――」（難波文恵），「第 2 章　中国語を母語とする日本語学習者と母語話者を対象とする非流暢性発話フィラーの音声分析」（李歆玥，石井カルロス寿憲，傅昌鋥，林良子），「第3章　発話のしにくさの自覚と調音運動の非流暢性」（北村達也，能田由紀子，吐師道子），「第 4 章　言いよどみの音声生理学的特徴に関する一考察」（林良子，孫静），「第 5 章　多様な話者の非流暢性を連続体として捉える試み」（林良子）。「第 7 部　（非）流暢性の獲得」には「第 7 部のねらいと論文紹介」（定延利之）に続き「第 1 章　幼児のことばの非流暢――E 児データによるケーススタディー――」（友定賢治），「第 2 章　非流暢な音声合成に向けて」（モクタリ明子，ニック キャンベル，ラム タイ フック，定延利之）。末尾に「付録　非流暢性の目録」（定延利之，丸山岳彦，遠藤智子，舩橋瑞貴，

林良子),「あとがき」,「索引」,「執筆者紹介」が付く。本書は科学研究費補助金（基盤（S）「非流暢な発話パターンに関する学際的・実証的研究」課題番号 20H05630）の成果報告書を兼ねたもので，JSPS 科研費（JP23HP5048）の助成を受けている。（椎名渉子）

（2024 年 2 月 22 日発行　ひつじ書房刊　A5 判横組み　546 頁　定価 9,680 円　ISBN 978-4-8234-1208-0）

上野和昭著『文献アクセント史論考』

論議書・平曲譜本・語学書・仮名遣書などの文献資料にもとづく日本語アクセント史に関わる論考，講演録などを収録する。本書の構成は以下のとおりである。「一　文献アクセント史研究の要点」「二　開合名目抄と名目開合抄」「三　補忘記の貞享版と元禄版」「四　補忘記に載る漢語句の音調」「五　論議書に見える「出合」の資料性」「六　平曲のことばと日本語史（講演録）」「七　譜本としての『平家正節』――〈日本語アクセント史〉からの提言――（シンポジウム記録）」「八　平家正節にみえる漢語サ変動詞のアクセント」「九　平曲譜による助動詞の独立性の検証」「十　契沖の仮名遣書と定家仮名遣」「十一　文雄のアクセント表記」「十二　本居宣長の四声認識」「十三　近世四声論拾遺」，以上 13 章からなる。（遠藤佳那子）

（2024 年 2 月 28 日発行　武蔵野書院刊　A5 判縦組み　298 頁　定価 11,000 円　ISBN 978-4-8386-0789-1）